本実践・研究から見えてくること

研究協力者　長瀬　達也
（秋田大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

２年Ｂ組図画工作科・三浦茉子実践「シャボンでつくろう　海のものがたり（絵）」
―「先導者的視点」と「同行者的視点」の２つの姿勢から考える実践的指導力の向上―

１．図画工作科の実践的指導力向上の糸口―本校「若手研修プロジェクト」から―

筆者は以前に「図画工作科では他教科と同じように、どの学校、どの学級であっても、子供たちの資質・能力が、教師の指導によって伸長されなければならない」という主旨のことを述べた。この気持ちは、いまだに変わっておらず、信念とも言える。無論、図画工作科のみに限ることではない。

このように考える筆者が、現場の状況をかいま見ると、どうしても小学校で図画工作科を担当する教員（ほとんどが学級担任）の少なくない方々が、造形（美術）教育、つまり造形（美術）による学びに対して、苦手意識を過度にもっていることが見受けられる。それが図画工作科への取り組み意欲や指導力を他教科より下げることにつながっているのではないか、と強く危惧している。

筆者は教員養成学部で、小学校教員免許状取得に必要な図画工作科の指導法などの科目を20年以上担当してきた。この中で、小学校図画工作科や中学校美術科で苦手意識を感じていた、何を学び何を身に付けたのかがわからない、などの真情を吐露されることが、いまだに多い。

弱音だが筆者には、小学校教員免許状取得を目指す学生の苦手意識克服や、指導意欲向上の妙案が、浮かんでこなかった。ただ担当してきた授業では、受講学生が提出する毎回の小論や作品に激励の意味も込めてコメントを記述したり、対面での秋田県立美術館での作品鑑賞を授業として実施したり、図画工作科学習指導案作成において題材研究を兼ねた師範作品（２つ以上）作成を義務づけたりしてきた。このような取り組みが、教育現場において結実しているのかは、いまだに検証できていない。

だが、子供の目線を基盤として、教員同士が各自の専門性を尊重し合って学び合う、本校「若手教員研修プロジェクト」を拝見すると、教員の図画工作科での意欲や指導力などを向上させる手掛かりや方策が見えてくる。是非、本校副校長である京野真樹氏の図画工作科指導力向上に関する、次の論文を手に取ってほしい。図画工作科においても、子供たちに内在する豊かな資質・能力が拓かれることを願う方なら、必ず参考になると筆者は考えている。

- 京野真樹「若手教員とのリフレクションで深める造形の学び」『美術による学び研究会メールマガジン』第481号（pp. 1-7、2023 年）
- 京野真樹「若手教員とのリフレクションで深める造形の学び（２）」『美術による学び研究会メールマガジン』第506号（pp. 1-10、2023 年）

２．２つの指導姿勢―「先導者的視点」と「同行者的視点」―

小学校の教員でも、自分のいわゆる専門教科の世界に閉じこもる現状がある。かつて必修とされていた「教員免許状更新講習」で、筆者は造形（美術）教育の講習を担当した。参加してくれた小学校教員はどなたも、図画工作科指導に意欲をもち、苦手意識を感じさせなかった。この状況を別の視点から見れば、図画工作科指導に苦手意識をもっている方々は、筆者の講習に参加されなかったと言える。図画工作科への苦手意識をもつ教員が、克服のために「教員免許状更新講習」のような研修に、自ら取り組むことは稀であろう。そして、時間的な制約などから、必修化の道は考えにくい。

このような中で、本校の若手研修は解決の糸口となると考える。筆者は本校の若手研修では、「先導者的視点」と「同行者的視点」の２つの指導姿勢から、授業づくりが行われていると考える。

「先導者的視点」とは三浦教諭のように、材料・用具の扱い方や造形（美術）における表し方に精通し、表現の過程の予想ができることを活かして、積極的に発想・構想や表現に関与するものである。この視点による指導は、図画工作科だけでなく、他教科においても頻繁に見られる。

対して「同行者的視点」とは、材料・用具の扱い方や造形（美術）における表し方は基本的な説明にとどめ、表現の方向性は大まかに提示し、発想・構想や表現には間接的に関与するものである。子供に寄り添い、表現者として認め励まし、各過程における疑問、方向性、選択を共に考えていくのである。この姿勢は一見消極的に見えるが、子供の主体的、意欲的、創造的な姿勢が「学びの主エンジン」で、学習過程が拡散的である図画工作科では、「先導者的視点」とともに重要であると考えられる。そして、全ての教員が目指すことができる、と筆者は考えている。

三浦教諭には以前から「先導者的視点」があった。その上で、「若手教員研修プロジェクト」に参加していく中で、「同行者的視点」さえも強く形成することができたと考えられる。なお、同研修において三浦教諭以外の方々は、三浦教諭から刺激されたり学んだりすることで、「同行者的視点」を磨き、獲得していたと考えられる。もちろん「先導者的視点」と「同行者的視点」は二者択一でなく、２つの視点を各人各様の配分比で、誰でも形成することが可能と筆者は考えている。

本校「研究リーフレット」で三浦教諭は「シャボンでつくろう　海のものがたり（絵）」の実践について活写し、客観的に成果と課題を分析、考察している。これを三浦教諭が「先導者的視点」と「同行者的視点」の２つの指導姿勢をもっていることを踏まえて読んでいただければ、図画工作科での実践に大いに役立つと確信している。